

大学教育における「活用型」授業の構想

東 茂美*・桐生 直代**

Concept of katuyou type lesson in university education

Shigemi HIGASHI* and Naoyo KIRYU**

概要

「全国学力・学習状況調査」の「活用」問題（B問題）は、情報の取り出しや解釈、熟考・評価などのリテラシーを測る PISA 型読解力に対応しており、日常生活で目にする素材や場面が使用されている。あくまで国語という教科で学ぶ力が活用できるかどうかを図るものであるが、実際の社会生活における「生きる力」につながっていくように意図されている。他方、大学では、企業や若者を取り巻く環境変化に対応するために、「基礎学力」・「専門知識」に加え、「学んだ知識を実践に活用するために必要な力」—社会人基礎力—の育成に力を入れている。まさに知識・技能の定着と習熟を目指し、探求につなげる「活用」活動である。

しかし、「現状の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を持ってさまざまな人々と共同する態度など、真の『学力』が十分に育成・評価されていない」という。いずれ「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入が予定されているが、そうであれば、今後要請されるのは、小・中・高・大における一貫性のある「活用型」の学びであり、その指導と内容、教材の精選であろう。小稿は、中学校の教材・学力問題を検討しながら、大学教育にふさわしい教材・授業づくりを提案する。

キーワード：「活用型」授業 全国学力・学習状況調査 国語B問題 小・中・高・大に一貫する国語教育

1 はじめに

「全国学力・学習状況調査」（以下、全国学力調査と略記する）は、小学校第6学年の児童および中学校第3学年の生徒を対象に、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を、原則「知識」「活用」の二種類の問題で出題している。「知識」とは、「身につけておかなければ後の学年の等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能など」^(注1)のことをいい、また「活用」とは、「知能・技能等を実生活のさまざまな場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力など」^(注2)である。

「全国学力調査」が始まった背景には、OECD（経済協力開発機構）による学習到達度調査（PISA = Programme for International Student Assessment）の順位低下の影響があったことは周知のとおりである。2003年調査において、国語にあたる読解力リテラシーが8位から14位に下がったいわゆる「PISA ショック」を受け、学習指導要領改訂ではPISA型読解力に対応した指導すべき学習内容が示された。ひとことでまとめてい

ば、新教育課程のキーワードである「習得」「活用」「探求」の一連のプロセスを組み込んだ「活用型」学習である。基礎的・基本的な知識・技能を「習得」し、それらを「活用」して、自ら課題を見つけ、学び、考えを深めて判断する、そうした学習活動である。

「全国学力調査」の「活用」問題であるB問題は、情報の取り出しや解釈、熟考・評価などのリテラシーを測る PISA 型読解力に呼応した問題であり、問題の素材として日常生活で目にする素材や場面が採用されている。あくまで国語という教科で学ぶ力が活用できるかどうかを図るものではあるが、実際の社会生活での「生きる力」につながっていくことが強く意図されているのである。

ところで、平成26（2014）年12月、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花咲けるために～（答申）」とそれに基づく平成27（2015）年1月の「高大接続改革実行プラン」が中央審議会から出された。これは、小学校・中学校での授業改善が進む中、「現状の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を

* 福岡女学院大学

** 福岡市立福翔高等学校

持って多様な人々と共同する態度など、真の『学力』が十分に育成・評価されていない」と指摘している^(注3)。もちろん、高等学校においても活用型の授業の導入は行われており、「活用」を意識したアクティブ・ラーニング型の授業の取り組みも行われている^(注4)。

それをふまえての「高等学校基礎学力テスト（仮称）」や「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が惹起するであろう諸問題については別稿にゆずるが、これらからうかがえるのは、現状における「活用型」の学習、ことに「B問題」のような学習と学力調査は、高等学校や大学には及ばず、いまだ中学校の段階でとどまっているといえそうである。

とはいえ、今日の大学教育では、まさにその「活用」の力の育成をねらいとするさまざまな学習活動が実践され、その報告が公になっている。その実践例のひとつが、経済産業省が平成18（2006）年から提唱している「社会人基礎力」であろう。「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）からなる「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」を設定し、企業や若者を取り巻く環境変化に対応するために、「基礎学力」・「専門知識」に加え、「学んだ知識を実践に活用するために必要な力」をいう^(注5)。「基礎学力」が「読み、書き、算数、基礎 IT スキルなど」を指し、国語がすべての教科の基本である以上、大学における国語教育のひとつに「B問題」で採択された教材と等質の教材を導入することは有効であるように思われる。知識・技能の定着と習熟を目指し、探求につなげるの学習活動である。すでに初年次における国語（日本語）やキャリア教育では、新聞記事の読み取りやパンフレットの作成などが、多くのテキストで教材として採用されている。

広く実態を調査したわけではないものの、管見にしていうなら、大学教育で採択されている教材や実践の内容が、小学校・中学校の「国語」教材と授業をじゅうぶんふまえ、それまでの学習内容を受けのかたちで導入され実践されているとはとうてい言いがたいのが、現状ではないか。もちろん、上述する教材やその実践のすべてを否定するわけではない。高等学校教育で生じた空白を、初年次教育というかたちで新たに学びなおす機会を提供している点では、大きく評価してもよいからである。

こうしてみると、今後「活用」の力の育成をねらいとする大学教育でおそらく必要になってくるのは、小・中・高・大をとおして一貫性のある「活用型」の学びであり、その指導と内容、教材の精選ではないか。「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が、それぞれ平成31年（2019）度、平成32（2010）年度導入予定である以上、まずは中学校の教材・学力問題、そして高等学校の教材・学力問題を検討し、それらをふまえた大学教育にふさわしい教材・授業づくりの構想と提言とが、もっと活発におこなわれて然

るべきではないかと思われる。

小論ではその試みとして、国語力の向上に向けた授業を目的とし、平成28（2016）年度「全国学力調査 中学校国語B問題Ⅰ」をまず取り上げ検討したうえで、自主教材として大分県九重温泉郷が作成したパンフレットを用いながら、文学と風土との関わりを学ぶ授業案、大学での「活用型」授業の実践を提言する。

2 平成28（2016）年度「全国学力・学習状況調査」国語B問題について

平成28（2016）年度「全国学力・学習状況調査」中学校国語B問題について、引用が長くはなるが、後述のために煩をいとわず、問題Ⅰの紹介と関連する結果と課題をあげる（記号等はそのまま用いた）^(注6)。

1 出題の主旨

- ・文章の中心的な部分と付加的な部分とを読み分け、要旨を捉えること
- ・目的に応じて必要な情報を読み取ること
- ・文章の構成や表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えを具体的に書くこと

社会生活のさまざまな場面で、ちらしやポスター、パンフレットなどを目にする機会がある。

また、学校生活の中でもこれらを読んだり、作成したりする機会がある。

本問では、博物館のちらしを取り上げた。ちらしを読んで、そこから「暮らしの中の伝統文化展」を開催する狙いを捉えたり、目的に応じて情報を関連させながら読み取ったりすることに加え、ちらしの表現の工夫やその効果について、根拠を明確にして自分の考えを具体的に書くことを求めている。

2 解説

設問一

趣旨

文章の中心的な部分と付加的な部分とを読み分け、要旨をとらえることができるかどうかをみる。

■学習指導要領における領域・内容

〔第1学年〕C読むこと

イ 文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること。《文章の解釈》

■評価の観点

読む能力

〈稿者の解析〉

表の期間から第1期～3期までであり、それぞれ「漆」、「和紙」、「織物」が取り上げられることが分かる。そして、「暮らしの中の伝統文化展」という見出しと、裏の「『伝統文化』という遠い存在のように感じられますが、実は今の暮らしの様々なところに息づいています」から、「漆や和紙、織物などの日本の伝統文化と現在の生活とのつながりについて知ってもらおうことが、『暮らしの中の伝統文化展』が開かれる狙いであること」を読み取らせる問題である。

正解率は76.7%、無解答率は0.2%。正解率はB問題全9問中2番目に高い。

設問二

趣旨

目的に応じて必要な情報を読み取ることができるかどうかをみる。

■学習指導要領における領域・内容

〔第1学年〕C読むこと

カ 本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取ること。《読書と情報活用》

〈稿者の解析〉

ちらしの裏には「開催期間中の日曜日」としか書かれていない。したがって、表に記載されている「5月21日（土）から6月19日（日）」に注目し、そこから日曜日を推測し、選択肢から選ばなければならない。正解率は83.6%とB問題中最も高いが、無解答率が0.2%あり、検討をつけることができなかつた生徒がいることもうかがえる。

設問三

趣旨

文章の構成や表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えを具体的に書くことができるかどうかをみる。

「4年間のまとめ【中学校編】」では、目的を持ち、表現の仕方や文章の特徴に注意して読むことに課題があると分析している。そこで本設問では、博物館のちらしの表現の工夫とその効果について説明する場面を設定した。ちらしの表と裏から、それぞれの表現の工夫を取り上げるとともに、その効果について自分の考えを具体的に書くことを求めている。

■学習指導要領における領域・内容

〔第2学年〕B書くこと

ウ 事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。《記述》

〔第2学年〕C読むこと

ウ 文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。《自分の考えの形成》

■評価の観点

国語への関心・意欲・態度

書く能力

読む能力

（正答の条件）

次の条件を満たして解答している。

- ① 「表は、……。裏は、……。」という形で書いている。
- ② 【博物館のちらし（表）】と【博物館のちらし（裏）】の表現の工夫と、その効果を具体的に書いている。
- ③ 四十字以上、八十字以内で書いている。

（正答例）

- ・ 表は、日付を大きく示していて、開催期間が把握しやすい。裏は、「……ませんか」と呼びかける表現を用いていて、親しみがわきやすい。(64字)
- ・ 表は、器のイラストの中に文字が書いてあり、タイトルの印象が強い。裏は、展示内容や関連イベントという項目が設けてあり、伝統文化展の第一期の全体像がよく分かる。(79字)
- ・ 表は、大きな器があり目を引きます。裏は、図があり室内の順路が分かりやすくなっています。

(44字) (下線部は稿者による。傍線部は根拠、波線部は効果についての「自分の考え」)

〈稿者の解析〉

正解率は68.4%。B問題中4番目の正解率であるが、無解答率が7.6%。これはB問題3「図鑑の説明を読むことで、よく分かるようになった物語の部分と、その部分についてどのようなことが分かったのかを書く」の無解答率22.2% (正解率は58.4%) に次いで高い。

趣旨にあるように、表と裏に書かれていることを根拠とし、その効果について自分の考えを述べるのが求められているが、PISA 調査でも指摘されているように、依然として苦手分野であることが分かる。

次にB問題全体の「課題等」と「授業改善のポイント」を見てみよう。

○課題等

主な特徴

- 自分の考えを書く際に、根拠を示すことは意識されているが、根拠として取り上げる内容が適切かどうかを吟味したり、どの部分が根拠であるかが明確になるような表現上の工夫をしたりする点に、依然として課題がある。〔B①三、B③三〕
- 資料を基にして自ら課題を決めてはいるが、課題の解決に向け、具体的な情報収集の方法を考える点に課題がある。〔B②三〕

書くこと

- ◆ (B) 根拠を明確にして自分の考えを具体的に書くことに依然として課題がある。〔B①三、B③三〕

読むこと

- ◆ (B) 文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめることに課題がある。〔B①三〕
- ◆ (AB) 課題の解決に必要な情報収集の方法を身に付けることや、資料から読み取った情報を適切に活用することに課題がある。〔A⑧二、B②三、B③二、三〕

○指導改善のポイント

書くこと

- 伝えたいことを相手に分かりやすく書く指導の工夫
 - ・ 文章の中の自分の考えや気持ちについて根拠を明確にして書く力を身に付けるために、自分の思いや考えを繰り返すだけではなく、複数の事例や専門的な立場からの知見などを示すように指導する必要がある。また、表現しようとする内容にふさわしい語句を選んで書くように指導することも大切である。

その際、読み手はその文章を読む意図や目的を意識しながら、考えの根拠となる内容が適切に取り上げられているか、読み手に対してどの部分が根拠であるかが分かるように示されているか、伝えたい事柄等にふさわしい語句や文の使い方になっているか、文の成分の順序や照応は適切かなど、文章を複数の観点から見直すように指導することが重要である。

読むこと

- 文章の構成や展開、表現の仕方について自分の考えをまとめる指導の工夫
 - ・ 文章の構成や展開、表現の仕方について自分の考えをまとめる力を身に付けるために、自分の考えを支える根拠となる段落や部分などをあげるように指導する必要がある。その際、書き手の意図との関連を考えさせることが重要である。文章の構成や展開、表現の仕方についての印象を持つにことにとどまらず、そのような表現をした書き手の目的や意図を考えたり、その効果について考えたりするように指導することが大切である。
- 課題の解決について情報を収集し整理する指導の工夫
 - ・ 課題の解決に必要な情報を集めるための方法を身に付けるとともに、資料から読み取った情報を適切に活用する力を身に付けるために、自ら課題を設定し、基礎的・基本的な知識・技能を活用し、他者と相互に思考を深めたりまとめたりしながら解決するように指導する必要がある。その際、他領域や他教科等の学習との関連を図るなどして課題を設定し、課題の解決に向けて学校図書館や地域の図書館、公共施設、あるいはコンピューターなや情報通信ネットワークなどを利用して情報を収集し整理する学習活動を取り入れることが重要である。

これらの記述から、主たる課題は、根拠を明確にして自分の考えを持つことといえそうである。PISA 型読解力では、本文中の情報を正確に取り出し (情報の取り出し)、本文を根拠にして推論し (解釈)、本文と自分の知識や考え方や経験を結びつける (熟考・評価) という批判的読解力 (クリティカル・リーディング) が求められるが、この「課題等」と「指導改善のポイント」からも、批判的読解力の改善と向上が意図されている。

また、用いられる文章も PISA でいう図表や写真などの「非連続型テキスト」を取り入れることが求められている。今後は、教科書教材にのみ依拠するのではなく、学習者の生活に即した適切な学習材を開発していくことも、教育現場での課題となるであろう。

3 「活用型」授業の一試案

それでは、実際に配布されている温泉地のちらしを用いて、実用的な文章の読み取りから文学的文章の読解への授業を展開する。ここでの授業の対象は大学生である。「活用型」の授業をとおした主体的な読者の育成には、このような学習環境と環境が効果的であると考えている。

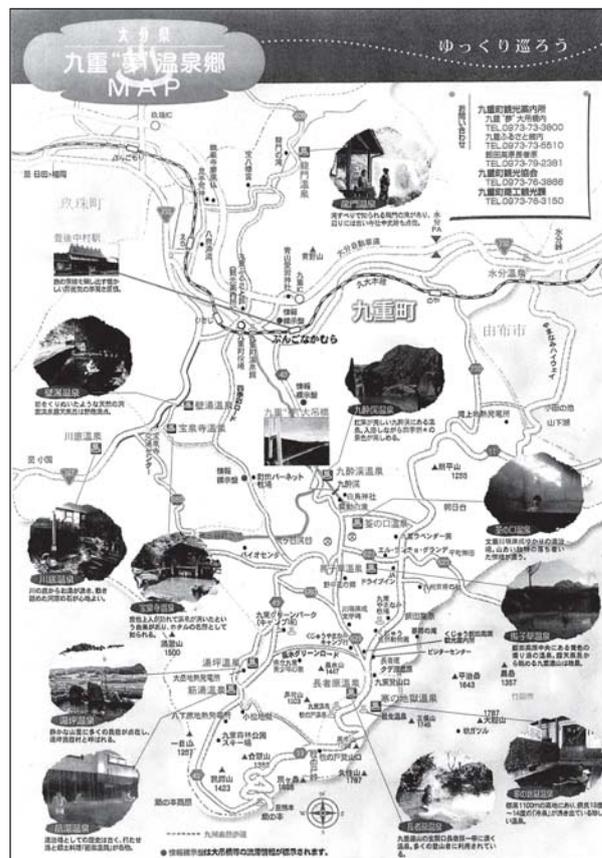
日本一の温泉県として全国に大々的な宣伝をおこなっている大分県九重町に、「九重“夢”温泉郷（このえゆめおんせんきょう）」という地域がある。町内にある宝泉寺、壁湯・川底・龍門・湯坪・筋湯・釜の口・長者原・寒の地獄の九つの温泉を、かつて「九重九湯（このえきゅうとう）」と呼んでいたが、九重町の温泉をより多くの人に親しんでもらえるよう、温泉郷の名前を公募し、平成19（2007）年10月、「九重“夢”温泉郷」と新たに命名され、馬子草、九酔溪、水分の三つの温泉が加わっている（注7）。

下図は、そのちらしである（注8）。

（表）



（裏）



このちらしを、先にあげたB問題①の「学習指導に当たって」の、(1)「身の回りにあるちらしなどの具体的な資料を提示し、何を知らせようとしているのかという観点から全体を見て、発信されているメッセージや情報を捉える学習活動」として用いる。まずは、「学習指導に当たって」を見てみよう。

3 学習活動に当たって

(1) 実用的な文章から情報を読み取る

ちらしやポスター、パンフレットなどの実用的な文章を読む際には、目的に応じて中心的な部分と付加的な部分とを読み分け、内容を的確に捉えることが大切である。例えば、身の回りにあるちらしなどの具体的な資料を提示し、何を知らせようとしているのかという観点から全体を見て、発信されているメッセージや情報を捉える学習活動が考えられる。

(2) 目的に応じて必要な情報を関連付けて読み取る

ちらしやポスター、パンフレットなどから必要な情報を得るには、資料の特徴を捉え、目的や場面に応じて情報を選択して整理することが大切である。指導に当たっては、複数の情報を合わせて必要な事柄を整理する学習活動が考えられる。その際、複数の情報を関連させることによって分かる情報があることに気付くように指導することも大切である。

(3) 文章の構成や展開、表現の仕方について考えることは、様々な文章を自分の目的に沿って活用することや、自分で文章を書く際に表現の工夫について考えることにもつながる。例えば、ちらしやポスター、パンフレットなどの構成や展開、表現の仕方に着目し、そのような表現をした書き手の目的や意図を考えたり、その効果について考えたりする学習活動が効果的である、その際、自分の考えを支える根拠となる部分を挙げるように指導することが重要である。

(1)・(2) は PISA 型読解力でいうところの「情報の取り出し」、(3) は「解釈」を意図している。そこで、(1)・(2)、(3) をふまえ、非連続型テキストの情報を正しく読み取るとともに、情報発信者の意図をとらえる問い(読む能力)を作成した。

○ (1)・(2) をふまえた「情報の取り出し」の問い

1 問：ちらしの表にある「九重の温泉に宿泊した川端康成」とありますが、どこに宿泊しましたか。

解答例：釜の口温泉

2 問：ちらしの表にある「13℃くらいの冷泉もあるらしいよ」はどの温泉ですか。

解答例：寒の地獄温泉

3 問：(ちらしの表と裏を読ませ) 九重“夢”温泉郷と関わりの深い人は誰ですか、また、どのような関わりがありますか。

解答例：ノーベル文学賞作家の川端康成が釜の口温泉に宿泊して『波千鳥』という作品を書いた。

このちらしから読み取れるのは、九重が川端康成の小説『波千鳥』の舞台であることであろう。

ちらし(表)に、文字のサイズに変化をもたせながら印刷されている解説文は、次のとおりである。

- ・ ああ、来てよかった。と私は声に出して言いました(川端康成「波千鳥」より)
- ・ 「風景をみて歩いているうちに、九重山を中心にしてなら書けそうな気がしてきた—川端康成」
- ・ 九重の温泉に宿泊した川端康成の「波千鳥」はそうして書き上げられました。
- ・ 情緒あふれるはるばるとした九重の風景がノーベル賞作家の繊細で美しい筆致で描かれ、読者を夢の温泉郷へと誘います。
- ・ 文豪の創作意欲も沸き出したその風景に、あなたも会いに来てください。
- ・ 高原の優しさに触れ、四季を感じ湯に癒され、宿から満天の星空を眺め、夢を見る。

・ 「ほんとうに美しい夢の国」九重夢温泉郷。

○ (1)・(3) をふまえた解釈の問題 *それぞれ、ちらしの左下の文章を根拠にして、自分の考えを述べさせる。

問：このちらしからこの温泉は何をアピールしていると考えられますか。「表は……と裏は……」という形で書くこと。

解答例：表は「夢」という言葉が三つ使われていることから、ほんとうに夢のように美しい場所であることを強調している。裏は温泉の地図があるので、場所が具体的に分かるようになっている。自然と源泉の力が湧き出す「場所(トボス)」としての温泉が表出されている。表は温泉に入っている人と「ああ、来てよかった。と私は声に出して言いました」というセリフがあるので、ほんとうにその人が言っているように思えます。裏は、それぞれ写真が載っているので、イメージを持ちやすくなっています。旅という非現実の空間へ、「ことば」でもって誘う効果が、顕著に表れています。

問：「ほんとうに美しい夢の国」とはどのような国だと思いますか。

解答例：四季を感じられ、高原が美しく窓から星空が見えるように自然に囲まれたところだと思います。

問：なぜ“夢”に“ ”がつけられているのでしょうか。

解答例：こんなに美しい場所は他にはないという意味を強調しているため。

「嬉しくて夢のようだ」という言い方をするように、最高であることをあらわすためだと思います。

(3) の「ちらしやポスター、パンフレットなどの構成や展開、表現の仕方に注目し、そのような表現をした書き手の目的や意図を考えたり、その効果について考えたりする学習活動が効果的である。その際、自分の考えを根拠となる部分をあげるように指導することが重要である」をふまえた問題である。

このように、「九重“夢”温泉郷」はノーベル賞作家川端康成というフィルターをかけられ、情緒あふれる場所として描き出されている。こうして、町の PR に景色や食事の美味しさだけでなく、文学作品の舞台としての一面があるのは、読書活動などにつなげることもできよう。

4 ちらしからのアプローチ—『波千鳥』を読む—

3では「ちらし」を用い、実用的な文章の読み取りを試みた。そこで読み取られるのは、雄大で美しい自然と豊かな夢のような温泉地という風景である。しかし、先に紹介したように、「夢」というネーミングは公募によるものであり、先に観光地として有名になった「九重“夢”大吊橋」に合わせたものでもある。また、「九重“夢”温泉郷」や「九重観光協会」のサイトには、「“夢”温泉郷」の由来は載っていない。あくまでも、この文学が醸し出す温泉風景はちらしの中のみ存在するのである。つまり、「解釈」であげた「ほんとうに美しい夢の国」の解釈の限界はここにある。やはり「ほんとうに美しい夢の国」がどのようなものかを、実際のテキストから読み取ることが忘れてはなるまい。

『波千鳥』は『千羽鶴』という小説の続編である。「続千羽鶴」として、「小説新潮」昭和28（1953）年4月号から発表されたが、川端が原稿を紛失したため未完に終わっている。

『千羽鶴』は主人公菊治が父の愛人であった栗本千加子の茶会から始まる。そこで菊治はゆき子という千羽鶴の風呂敷を持った女性と見合いをするが、そこで出会った、またもや父の愛人であった太田夫人と関係を持ってしまう。しかし太田夫人は罪の意識から自殺する。太田夫人には文子という娘がいたが、文子は母を責めた罪に苛まれ、同じく罪の意識を持つ菊治と文子は関係を持ってしまう。菊治は文子によって救われた思いをするが、文子は菊治の前から姿を消してしまう。ここまでの『千羽鶴』の内容である。

そして、九重を訪れた川端がこの続きを書こうと決心し、書かれたのが『波千鳥』である。文子が失踪してから一年、菊治はゆき子と結婚するが、いまだゆき子と肉体関係を結ぶことができない。そのような中、文子からは長い手紙が届く。父の故郷である大分県竹田、別府、九重での日々と、母や菊治への思いが綴られた手紙である。

川端と高田力蔵との交友、大分来訪、原稿の紛失、執筆意欲などについては、石川巧氏「観光小説としての『波千鳥』川端康成論（五）」^(注9)にくわしい。石川氏は「小説のなかに観光ガイド的な描写を織り込み、小説という雑種的なジャンルを通して『その名前を聞くだけで、そこを訪れたことのない人々にも何らかの雰囲気を感じ起こしうる』ような『名所』を表現してみようとした川端の貪欲さ」という「小説作法のありよう」を論じられている。傾聴すべき点も多いが、ここでは紹介するだけにとめておきたい。

問：「ほんとうに美しい夢の国」の内実を、本文から読み取りましょう^(注10)。

九重というのは、左から数えて、黒嶽、大船山、久住山、三俣山、黒岩山、星生山、狹師嶽、湧蓋山、一目山、泉水田など、連峰の総称です。それらの山々の北側一帯が飯田高原です。

山々の北側と言っても、湧蓋山などは西へまわっていますし、崩平山などは原の北にありますし、山々にとりかこまれたあるいは、四方の山々にさええられて浮かんだ、高原という円さがあります。ほんとうに美しい夢の国がここに浮かんだような高原でした。山は紅葉していますし、すすきの穂波は白いのですけれど、私は高原にやわらかい紫がただよっているように感じました。高さはだいたい千メートル、東西も南北も八キロメートルの広さだそうです。

その南北を私は渡って行くわけです。広い原にさしかかりますと、行く手真直ぐの三俣山と星生山とのあいだに硫黄山の煙が遠く見えました。山々は晴れ渡っています。右手の湧蓋山の空に淡い白雲のかけらが浮いているだけでした。東京を立つ時から、この高原の「立派な天気」をねがって来た私は、しあわせしました。

この飯田高原は多くの人も言うように、ほんとうにロマンチックななつかしさです。やわらかくて、明るくて、そしてはるばるという思いをさせながら、静かに内へ抱きつつまれたという思いをさせます。南につらなる山々も温和で気品のある姿です。（「旅の別離」四）

本文からは、「ほんとうに美しい夢の国」が飯田高原のことであると分かる。山々に囲まれた、すすきの穂が揺れる高原。「円さ」「やわらかい紫」とあるように、そこはどこまでも優しい。また、後半に「この飯田高原は」とあるので、そこからも「ほんとうに美しい夢の国」を読み取ることができる。「ロマンチックななつかしさ」で「やわらかくて、明るくて、はるばるという思いをさせながら静かに内へ抱きつつまれたという思いをさせる」ものである。「やわらかい」「内へ抱き包まれた＝とりかこまれた円い」という共通する要素にも注目させたい。「美しい」といっても、様々な美しさがある。「明るく」とあってもそこには程度がある。ここでいう明るさとは、やわらかな光のような明るさといえようか。包み込まれるような懐かしさを感じる、いわば優しさや癒しを感じさせる場所。つまり、ここでの美しさとは、暖かいやわらかい光のような美しさといえるだろう。

問：「ああ、来てよかった」という文子の心情について考えましょう。

高原のなかほどらしい長者原まで来て、私は松かげに長いこと休んでいました。長者原には松のまばらな群れ

が散らばっていて、私は草原のなかの松に誘われたのでした。少し歩いて、また松かげで、おせい弁当を食べました。二時ごろだったでしょうか。広い草もみじを見まわしていると、私の位置から言って、日光を受けているところと、逆光になっているところでは、色が微妙にちがいます。山々の色もそれぞれちがいます。紅葉の色の濃い山は、スタンド・グラスでも見るようです。そうして私は大きい自然の天堂にいるようです。——ああ、来てよかった。と私は声に出して言いました。私は涙を流して、すすきの穂波がなお銀の光にほやけましたけれど、悲しみをよごす涙ではなく、悲しみを洗う涙でした。

私はあなたを思い、そして分かれるために、この高原にも父の故郷にも来たのでした。あなたを思うことに、悔いや罪がつきまとはって、私はお別れできません。また私の出発を新しく出来ません。遠い高原までも来て、なおあなたを思うことをお許しくださいませ。お別れするために思うのです。草原を歩きながら、山をながめながら、私はあなたを思いつづけさせていただきました。

松かげにじっとあなたを思っていて、ここが屋根のない天堂なら、このまま昇天しないものかと、私はいつまでも動きたくありませんでした。私はうっとりあなたの幸福を祈りました。(「旅の別離」四)

上記の引用に「高原のなかほどらしい長者原まで来て」とあるように、「ああ、来てよかった」のは温泉ではなく、じつは長者原の高原なのである。そこはまるで「自然の天堂」、天上の世界のようだという。文子が旅に出たいきさつは、菊治との仲に罪を感じたからであった。しかし、その旅のなかで長者原の自然が文子を癒し、涙を流させる。涙は心身の浄化であり、「ああ、」という嘆息はまさに身体の奥から発され、「来てよかった」と声が出るその身体感覚は、まさに全身全霊で文子が生まれ変わったことを表しているといえるであろう。だからこそ、文子は天上を願い、「うっとり」と恍惚し、相手の幸福を祈るまでに純粋な存在となるといえようか。くりかえしていえば、それも、九重のあふれる湯に癒されてではなく、飯田高原にある長者原の自然によってである。

このように、ちらしと本文を比べれば、ちらしが本文にそったものではないことが明らかである。ちらしの見出しが書かれている箇所温泉はまったく出てこない。とくに、「ああ、来てよかった」のは、湯浴みするシーンではないのである。しかし、ちらしだけ見ると、読み手が『波千鳥』の登場人物が温泉に浸かって言ったせりふ、『波千鳥』のシーンの再現」と理解してもおかしくはない。

ある意味で「ああ、来てよかった」はどこにでも通用する〈フレーズ〉ではあるが、ちらしの「ああ、来てよかった」からは、映像の女性があたかも文子であるかのように映り、母や菊治とのことがらで心苛まれている文子が、九重の湯によって癒されているかのように映るの

である。そして、それを「ほんとうに美しい夢の国」が包括している。いわば、九重の温泉郷がノーベル文学賞作家・川端康成というお墨付きを得て、際やかにたち現れてくるのに注視すべきであろう。「非連続型テキスト」が「連続型テキスト」と相容れないかたちで、独自の主張を語りはじめるといってもよい。

ちらし(九重観光協会)が、『波千鳥』という作品を実にうまく利用していることが見えてくる。もちろん、これは批判されるべきことではあるまい。これこそがまさに文学が風土に溶け込むひとつの現象と解すべきであろう。「ちらし」という「非連続型テキスト」と『波千鳥』という「連続型テキスト」の相互の読みとその相乗効果をねらう「活用型」授業は、こうした学習材によっても可能になるのではないか。

5 まとめ

「全国学力・学習状況調査」における「活用」問題の設定は、学力・学習の実態を明らかにするという当初の目的をこえ、教育法に大きな影響をもたらしている。日常生活で目にする素材や場面が採択され、情報の取り出しや解釈、熟考・評価などのリテラシーを測る PISA 型読解力に対応し、日常生活で目にする素材や場面が採択されており、あくまで国語という教科で学ぶ力が「活用」できるかどうかを意識し、実際の社会生活における「生きる力」につながっていくように意図されているからである。広く知られるように、かつての「ゆとり教育」の弊害は、高等教育の現場も確実にむしばんでいる。「ゆとり教育」で育った人々が、教育を担う教師となっている昨今ではなおさらである。大学教育では、企業や若者を取り巻く環境変化に対応するために、「基礎学力」・「専門知識」に加え、「学んだ知識を実践に活用するために必要な力」—社会人基礎力—の育成に力を入れはじめている。まさに知識・技能の定着と習熟を目指し、探求につなげる「活用型」の学習活動というべきであろう。

とはいえ、現状の高等学校や大学の教育、大学入学者選抜の制度が、知識の暗記と再生に偏りがちであって、思考力・判断力・表現力や、主体性をもち、さまざまな人々と共同する態度など、真の学力が十分に育成・評価されていないのではないかという、教育批判の声も聞こえてくる。近い将来「高等学校基礎学力テスト」と「大学入学希望者学力評価テスト」導入が予定されているが、こうした新テストの導入は教育の方法自体の変革を迫るであろうことも、想像にかたくない。要請されるのは、小・中・高・大における一貫性のある「活用型」の学びであり、その指導法と内容の確立、そして教材の精選であろう。

ここでは中学校の教材・学力問題を検討しながら、大学教育にふさわしい教材・授業を提言してみたのであるが、もとより高等学校教育を視野にしながらの試みも必要であるのは、言を俟たない。

〈注〉

- 注1 国立教育政策研究所 教育課程研究センター「全国学力・学習状況調査」www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html(2017/11/01)。
- 注2 注1に同じ。
- 注3 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」文部科学省 中央教育審議会 www.mext.go (2017/11/01)。
- 注4 「活用型の学習とアクティブ・ラーニング -Kei-Net」www.keinet.ne.jp/gl/16/09/03kawai.pdf(2017/11/6)。
- 注5 www.meti.go/policy/kisoryoku(2017/11/01)。
- 注6 注1に同じ。以下、他には下記が出題された。
- 宇宙エレベーターについて疑問に思ったことと、それを調べるために必要な本の探し方を書く。
- 図鑑の説明を読むことで、よく分かるようになった物語の部分と、その部分についてどのようなことが分かったのかを書く。
- 注7 (公社) ツーリズムおおいた「大分観光協会情報公式サイト 日本一のおんせん県おおいた」www.visit-oita.jp/(2017/11/01)。
- 注8 九重町観光協会にて2011年に入手。
- 注9 編集敍説社『敍説』花書院 2001年。なお、1952年に川端が大分を訪れた際、中津から飯田高原までを案内した諏訪道左衛門氏へのインタビュー(石川氏による)も掲載されている。
- 注10 『波千鳥』の引用は『川端康成全集 第十二巻』(新潮社

1980年)を用いた。なお、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに直した。

〈参考文献〉

- ・有元秀文『必ず「PISA型読解力」が育つ七つの授業改革—「読解表現力」と「クリティカル・リーディング」を育てる方法—』明治図書 2009年。
- ・有元秀文『教科書教材で出来るPISA型読解力の授業プラン集』明治図書 2009年。
- ・有元秀文監修『単元計画・指導案・発問のつくり方がわかるPISA型読解力が絶対育つ授業実践事例集』教育開発研究所 2008年。
- ・大熊徹編著『中学校国語科「活用型」学習の授業モデル』明治図書 2009年。
- ・人間教育研究協議会『教育フォーラム43 〈活用〉の力とは何か—新しい学習指導要領の理念と実践』金子書房 2009年。
- ・「国語科授業に活かす進学主導要領キーワード事典」『教育科学 国語教育』(No.810) 2017年6月号 明治図書。

付記

拙稿提出後の2017年12月4日、大学入試センターは「大学入学共通テスト」の導入に向けた試行調査(プレテスト)の問題と結果を公表した。国語の記述式問題では、学校の部活動をテーマにした複数の文章や資料から情報を整理し、記述させる内容が出題された。